



## 相愛大学の現在

学問にも、土地の風景があるだろう。大阪は近世にあっては、日本古典学の契沖を、漢学の中井竹山の懐徳堂を、蘭学の緒方洪庵の適塾を、産み育んだ地であります。

懐徳堂の自由討究の学問精神と契沖が始祖となった近代的な学問は、大阪和学の源泉です。大阪の和学は、自由な気風と諸学に通ずる偏狭でないその伝統を、今に伝えています。

「伝統とは惰性ではない。畸形化の部分の多い制度や様式ではもちろんない。あらゆる時代において新鮮であろうとする努力であり、その不断の蓄積である。あるいは時代を挑発する力」（増田正造）であります。

そして「風景」は、それを描く芸術家の魂の象徴であるだろう。

「ある土地をある詩人なり作家なりが、どのような視点から、どのように個人的なスタイルでえがかくか——そのときはじめて、土地は「風景」になる——ということは、その詩人なり作家なりのもつ世界像と、切っても切れないつながり」（大岡信）を持っています。

今回の『研究論集』は第30巻です。記念号の企画として、相愛大学在籍の各教員に、それぞれの専門領域、研究や演奏などの活動を自由に記してもらう特集を組んでみました。

(1)氏名

(2)専門分野

(3)現在の活動について

の項目で、音楽学部、人文学部、人間発達学部、共通教育センターの順に、氏名は五十音順です。

御覧いただければ、相愛大学の現在が一目瞭然に分明することと思われま

## 【学 長】

- (1) 金 児 暁 嗣
- (2) 社会心理学、宗教心理学
- (3) 科研費助成研究（基盤研究（B）：宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連－苦難への対処に関する実証的研究－）の研究分担者として、精神的健康（ウェルビーイング・日常的な不安）や死に対する態度に宗教性がどのように関係しているのか、また、精神的健康と結びつくストレス関連成長（SRG）を取り上げ、宗教が苦難への対処となりうるのか、またその様態を実証的に明らかにするため、広範囲な調査を実施中である。

## 【音楽学部】

- (1) 赤 石 敏 夫
- (2) 音楽基礎教育・作曲
- (3) ソルフェージュ、音楽理論などの教育法の研究として様々な学会（日本ソルフェージュ研究協議会等）に関わり情報を集め、それを実践している。また、フランス・パリ音楽院と交流し音楽指導の材料の提供をしていただく、イギリスの Associated Board の音楽検定を日本で推進し、ヨーロッパの音楽教育の基本的な考え方を普及させようとしている。  
作曲家としては、所属団体を通して作品を発表している。近年はフランス、イタリアでの作品発表が続いており、作品が CD 録音されている。

- (1) 飯 塚 一 朗
- (2) トランペット、オーケストラ、金管アンサンブル
- (3) 相愛大学オーケストラ・ウインドオーケストラ・金管アンサンブル トランペットアンサンブルの指導の他、日本音楽コンクール（トランペット部門）・関西トランペット協会コンクール・全日本吹奏楽コンクール・全日本アンサンブルコンテスト・中日吹奏楽コンクールなどの審査員を務める。演奏活動としてソロ・アンサンブル、オーケストラ。日本各地のトランペット、アンサンブルの指導、講習会を行なう。関西トランペット協会副会長。

- (1) 石 村 真 紀
- (2) 音楽療法
- (3) 即興演奏を用いたヒューマニスティックアプローチによる音楽療法を高槻市の精神科病院にて主に発達障がいを持つ小児から青年期までのクライアントを対象に個人音楽療法を実施中。音・音楽を媒介としたクライアントとの交流過程に焦点を当て、クライアントの変容のみならず、クライアントに対峙するセラピストの対応・表現動機を中心に事象の療法的意味について探求している。これについては「関係性の展開に目をとめる」というテーマで日本音楽療法学会近畿支部における課題研究として提唱し、学会での取り組みとして発展している。

(1) 泉 貴 子

(2) 声楽

- (3) ・10月11日 相愛オーケストラ第60回定期演奏会（ザ・シンフォニーホール）、ベートーヴェン交響曲第9番  
 ・10月14日 中之島国際音楽祭（国際会議場グランキューブ）声の力ヴェルディコンサート  
 ・10月18日 教員による SOAI CONCERT（本町講堂）  
 ・11月4日 住之江の第九（南港ホール）  
 ・11月16日 ハーモニーコンサート（玉川聖学院谷口ホール）  
 ・12月1日 KAWAIUMEDA AUTUMN CONCERT（カワイサロン Jouer）、泉貴子ソプラノコンサート  
 ・2014年10月 関西二期会オペラ公演《ドン・カルロ》（兵庫県立芸術センター大ホール）エリザベッタ役で出演

(1) 稲 垣 聡

(2) ピアノ

- (3) 主な研究は20世紀の音楽作品、およびピアノを含む音楽作品の楽曲研究と演奏です。20世紀初頭の作品から新作に至るまで所属しているアンサンブル・ノマドをはじめ、作曲家の個展や各種音楽祭、日本音楽コンクール作曲部門、武満作曲賞、芥川作曲賞等本選会での作品演奏、その他時代を問わずソロ、室内楽、歌曲伴奏、レコーディング等幅広く演奏活動を行っています。これらの研究活動をふまえて教育においては、学内では専攻実技、伴奏法、ピアノ・デュオ、室内楽等の授業を担当し、学外では各種コンクールやオーディションの審査、また若手演奏家育成プロジェクト等にも携わっております。

(1) 井 上 麻 紀

(2) ピアノ

- (3) 大学での実技レッスン、授業を中心に演奏活動、コンクール審査、課題曲講座などを行っています。また、中学・高校生を対象にしたキャリア教育講座（母校にて）で音楽方面の進学を考えている生徒達に講座を行っています。

(1) 戎 谷 六 雄

(2) 指揮、クラリネット

- (3) 学内：合奏（オーケストラ）指揮／クラリネット・レッスン／演奏解釈  
 学外：芦屋室内合奏団音楽監督・指揮  
 高知大学医学部管弦楽団常任指揮者  
 京都薬科大学管弦楽団常任指揮者

- (1) 大 岩 元
  - (2) 情報教育、ソフトウェア工学、認知工学
  - (3) 慶応大学で開発した日本語によるプログラミングは、入門教育に効果があることが分ったが、専門のソフトウェア技術者からも、その利用に興味が集まりだした。また、外国人に対する画期的な日本語教育によって、不足する人材を海外から調達して、彼らを日本人化できることを実証しようとしている。30年前に開発した、かな漢字変換をしない日本語入力法を普及させて、欧米人と同じ効率で日本語を入力できるようにしようとしている。
- 
- (1) 小 栗 まち絵
  - (2) ヴァイオリン、室内楽、オーケストラの演奏と指導
  - (3) 相愛大学に奉職し28年、真摯に音楽に取り組む才能ある学生・生徒に恵まれ、その1人1人が可能性を最大限に生かしヴァイオリン・音楽を軸に社会と関わり幸せな人生を歩んでほしい、「教える事は学ぶ事」と教育に携わっており、担当した卒業生が国内外で活躍の場を拡げているのは嬉しい現状です。若いエネルギーと対峙する為の健康の大切さを痛感する近年、少なくなる自身で古近の名曲や初演曲を演奏する機会も持ち続けたいと願っています。
- 
- (1) 柏 木 玲 子
  - (2) 電子オルガン、ピアノ演奏、作編曲
  - (3) 電子オルガンを中心とした演奏活動や、他の楽器とのコラボレーションでの作品発表、自作曲の出版制作、音源制作。又、即興演奏・アレンジについてのワークショップを各地で開催しています。既存の音楽だけにとらわれずに自由な発想でジャンルを超えた音楽家の育成にあたっています。
- 
- (1) 黒 坂 俊 昭
  - (2) 音楽学（西洋音楽史）
  - (3) かつては西欧の16世紀・17世紀音楽及びイタリア・ロマン派オペラの研究をしていましたが、公務でポーランドを訪れる機会に恵まれたため、現在はポーランド音楽、とりわけ中世・ルネサンス期・バロック期の音楽の調査・検討に研究領域を広げています。またその研究の成果から見出されたポーランド音楽の特徴と同時期の西欧音楽の特徴とを比較し、加えて両者の影響関係を考察しています。

- (1) 児嶋 一江
- (2) ピアノ演奏、演奏指導
- (3) 相愛大学・高校・中学での指導の他、新聞社・楽器店主催のレクチャーコンサート・講座を行う。

全日本学生音楽コンクール・日本ピアノ教育連盟オーディション・全日本ピアノ指導者協会ピアノコンペティション等の審査を行う。

日本国内外の会場・国際音楽祭において、Pf ソロ・室内楽等の演奏活動を行う。

国際交流委員としては、特にドイツ・フライブルク音楽大学からの客員教授招聘・留学生派遣等の計画・実行に関わる。

- (1) 斎藤 建寛
- (2) 弦楽器（チェロ）
- (3) 学内におけるソロ、室内楽の他、チェロのみによる 10 数名のアンサンブル（教員、学生。卒業生による）の指導。チェロアンサンブルについては平成 23 年度以降、学内、大阪府庁等の演奏会に出演する。学外においてはソロ・室内楽の演奏活動を各地で展開。その他、1997 年創立以来、日本チェロ協会（本学客員教授堤剛会長、事務局はサントリーホール）評議委員として、チェロの啓蒙活動を行っている。

- (1) 佐藤 康子
- (2) 声楽（イタリア歌曲、イタリアオペラ）
- (3) 年間 6 回くらいのコンサート（昨年はローマ、イスタンブール、来年は上海がきまっております。）

また 3 年くらい前から狭い空間でのオペラ公演のプロデュースをし、好評を得ております。

その他、宝塚ベガコンクール、読売新聞社：日伊声楽コンクール、毎日新聞社：学生コンクールの審査員。

リッツカールトンホテルにて「歌と私」というタイトルで講演会

- (1) 砂田 和道
- (2) 文化政策、アートマネジメント
- (3) 東日本大震災後、音楽による現地への活動を行なっている。現在は文化芸術活動で復興を推進するための方法論や制度作りを、文化芸術による復興推進コンソーシアムの検討会議に助言している。

(1) 竹 林 秀 憲

(2) フルート

(3) フルートに手を染めたのは12歳の時でした。中学入学時に初めて聴いた吹奏楽部の演奏に雷に打たれた如く感動したことを鮮明に覚えています。それから50有余年、この楽器と共に人生を送ってきました。自分を振り返る意味も含めて、～人々はなぜ笛の音に惹かれるのか～をテーマに、3年間に5回の演奏会を企画しました。既に今年2回開催しました。第1回は、「木管五重奏+ピアノの魅力」、第2回は、「フルート400年の一人旅」です。残る3回も、様々な演奏形態でフルートの魅力を解き明かしたいと思っています。

(1) 田 辺 良 子

(2) ヴァイオリン

(3) ヴァイオリンの魅力を一人でも多くの人々に伝えるのを目標に、技術だけでなく内面も磨きたいと考えている。また、年に1、2回はレジス＝パスキエ氏のレッスンを受けにパリに飛ぶ。2013年5月には近年の研究発表を兼ねてソロ・リサイタルを開催。自分が必死に練習している時期には、なぜか学生達は上達する。他にコンクールの審査等、依頼されたら行ってさらに視野を広げている。

(1) 中 谷 満

(2) 打楽器

(3) 現在、マルチパーカッションやティンパニーの奏法と音色について研究を重ねています。パーカッションに於いては、武満徹作曲、「四季」におけるパーカッションの音色の探索、研究、実践。

ティンパニーに於いては、カーター作曲「8つのインベンション」についての研究を重ねています。特に作品中のカーター氏の技法、テンポ、リズムの転調についての研究と実演。

更に打楽器アンサンブルの近代、現在に於ける作品の研究に努めています。特にスティーブライヒ作曲「ドラミング」全曲演奏に臨み、各四部のスティーブライヒ独特の作曲技法における、ミニマルミュージックの世界を打楽器研究室の学生と共に体験、研究を重ねています。

(1) 橋 田 光 代

(2) 音楽情報科学

(3) 音楽における表現と構造、それらをつなぐデザインに関する研究に取り組む。とくにコンピュータによる音楽演奏生成（演奏表情付け）に関心を持ち、コンピュータと人間とのインタラクションを通じた音楽演奏インタフェースの開発や、人間のように表情豊かな演奏を生成するシステムのための演奏聴き比べコンテスト Rencon を主宰する。また、定量的評価のための演奏表情データベース CrestMusePEDB の制作に携わる。

## (1) 林 裕

## (2) チェロ、音楽表現、チェロ奏法、チェリストの作品

- (3) チェリストが作って、有名にならなかった物や、忘れ去られた曲を実演する [Cellist = Composer・Collection] という活動を続けている。これに対して、名古屋音楽ペンクラブ賞、大阪文化祭賞グランプリ、音楽クリティッククラブ賞本賞、文化庁芸術祭優秀賞を受賞。

没後 100 年を記念して、ポッパーチェロコンクールを相愛大学南港ホールで開催し、審査員長をつとめる。

革命的なチェロ奏法を考案している。チェロを支える器具（ユーモレスク）で、実用新案、意匠登録。エンドピンを滑らさず、安定して支えられるペザンテを開発。

## (1) 前田 昌宏

## (2) サクソフォン

- (3) 25 名によるサクソフォンアンサンブルに取り組み高い成果をあげている。同属楽器による独自の響きを体験し、様々なジャンルの音楽に接しながら、個人では成し得ない高度な技術と深い知識を得ている。また付随する運営に携わることで、対人関係やチームワークの必要性など社会性をも身につけることができるようになった

## (1) 松谷 葉子

## (2) 経営学（組織論、しごと能力、起業論、経営哲学）

- (3) 消費が成熟し、これまでの大量消費大量生産の時代はとっくに過ぎ去り、インターネットの影響により情報の不均衡が解消されてしまった昨今、個人のしごとの範囲も拡大し、従来の経営学／経済学の前提が通用しない状況となってきました。このような時代に適した新しい企業の形、組織のあり方、しごとのあり方を研究するとともに、「しごと」「組織」が地域に与える影響、地域社会との新しい連携の形を研究しております。

## (1) 松本 直祐樹

## (2) 作曲

- (3) 現代的手法による作曲が研究テーマです。1970 年代にフランスで提唱されたスペクトル技法から演繹した高次倍音に由来する和声法、そして（私自身は言葉に違和感を感じていますが）東洋的時間と形容される時間感覚を融合させることを創作の手法としています。究極目標は「未聴感」に到達することですが、その道のりは長そうです。

## (1) 山田 健 司

## (2) 声楽

## (3) 研究活動

関西二期会に所属し、モーツァルトのオペラ『フィガロの結婚』『コシ・ファン・トゥッテ』『魔笛』等の作品を中心に演奏活動を行っている。また、第九のソリストとして毎年演奏を行っている。

## 教育活動

ベガコンクール、滋賀県高校声楽コンクール、奈良県高校声楽コンクール等の審査を行う。

## 大学担当授業

声楽専攻実技、オペラ演習、日本歌曲研究、真宗礼拝音楽、真宗礼拝音楽実習を担当している。

## (1) 山 本 英 二

## (2) 音楽、ピアノ

(3) ソロ・連弾・2台ピアノ・室内楽等の演奏活動の他、各地において公開講座（楽譜の違いが演奏に与える影響）やピアノ公開レッスン、ピアノ演奏講座等を行いピアノ指導者や後進の指導にあたっている。社会活動としては、ヤマハ音楽振興会のピアノ演奏グレード審査をはじめ、多くの国内ピアノコンクールの審査を行っている。また全日本ピアノ指導者協会においてステーション代表として子供から大人までを含めた地域の音楽普及に努めている。

## (1) 米 田 哲 二

## (2) 声楽

(3) 各種コンサート、オペラ公演に出演する。

## ①ヴェルディ生誕 200 周年オペラガラコンサート

指揮者：ダニエル・アジマン、管弦楽：大阪交響楽団、いずみホール、2013 年 6 月 27 日

## ②関西二期会公演オペラ「魔笛」弁者役

指揮者：北原幸男、演出：ネリー・ダンカン、管弦楽：ザ・カレッジオペラハウス管弦楽団、アルカニックホール、2013 年 11 月 9 日

## ③オラトリオ「メサイア」バス独唱

指揮者：谷村 浩、管弦楽：枚方メサイア管弦楽団、枚方市民会館大ホール、2013 年 11 月 24 日



## 【人文学部】

(1) 石川 玲子

(2) 英文学

(3) Virginia Woolf および Katherine Mansfield の作品について研究を進めている。特に、近年モダニズムとのかかわりで議論されている「成長」「イニシエーション」「社交」などのテーマに関心を持っている。学会活動としては、日本ヴァージニア・ウルフ協会の運営委員として、2012年度から学会誌『ヴァージニア・ウルフ研究』の編集委員を務めている。

また2013年9月の相愛大学公開講座にて、『英文学への誘い』と題して、英米短編小説の魅力を紹介した。

(1) 大村 英昭

(2) 宗教社会学、臨床仏教学

(3) ①井上俊氏との共編著『別れの文化－生と死の宗教社会学』を朱鷺書房から出版（4月）。

②『読売新聞』夕刊にインタビュー記事（5月20日）。

③「生き方を考える社会フォーラム」において公開シンポジウム『続・男もつらいよ』を開催（7月15日）。

④『中日新聞』（→『東京新聞』）に2回連載記事（8月3・10日）。

⑤機関誌『大乘』に「巻頭法話」を連載中

⑥『御堂さん』11月号に中村仁一医師との対談記事。

(1) 小野 真

(2) 宗教学、宗教哲学、仏教音楽

(3) ハイデッガー全集の翻訳や晩年の西谷啓治の宗教哲学の研究に取り組む。また仏教法会の構造の宗教学的解明を進めている。雅楽演奏者としても四天王寺をはじめ近畿の寺社を中心に活動。

(1) 片岡 尹

(2) 国際金融

(3) 講義の内容を充実することも兼ね、それまでの「ドル本位制」から研究テーマを変更しました。トヨタシステムに代表されるいわゆる日本的生産システムと株式持ち合いに象徴される日本のガバナンスおよび金融構造（銀行預金の選好が基礎）との関連を、国際競争力を結び目として歴史的に分析しようと思っています。

(1) 呉 谷 充 利

(2) 建築学、文学

(3) 私は、一研究として、「制作」つまり「つくる」ことを少し哲学的に考えています。構造と力学の合理的解釈に拠り、中世ゴシック建築を修復したヴィオレ＝ル＝デュクやこの考えかたを自身の制作に継承するル・コルビュジエの近代建築についての研究などが思索の発端にあります。思想としていえば、マラルメ、ヴァレリー、田辺元、森田慶一等を先達として、観想の知ではない制作における精神のはたらきをさらに敷衍し、論述してみたいと思っています。

(1) 桑 原 義 登

(2) 児童臨床心理（いじめ、不登校、非行、障害児、児童虐待等）

(3) 「被虐待児童の児童養護施設等での処遇改善に関する調査研究（科学研究費助成）」で、和歌山県における児童虐待の処遇実態調査と、児童養護施設等入所児童の心理特徴の分析及び退所児童の生活実態調査を行っており、行政等への提言を行う予定である。母子生活支援施設、発達障害者支援センター、学校訪問による臨床心理的支援。和歌山県社会福祉審議会委員、和歌山県人権施策審議会会長代理等。

(1) 佐々木 隆 晃

(2) 仏教学、真宗学

親鸞教義、浄土真宗の伝道について

(3) 相愛大学において、学生にとって精神的に豊かな大学生活となるよう、また今後の活動の心の支えとなるよう、建学の精神である仏教・浄土真宗の教えをお伝えしています。

学外においては、本願寺関係の学校、公開講座・文化講座、浄土真宗寺院などで、仏教や浄土真宗の教えを味わい、体感していく時間を積極的にもち、もって教育と研究に活かしたいと考えています。

(1) 積 徹 宗

(2) 比較宗教思想、宗教文化

(3) 次年度から取り組む予定の研究テーマがふたつある。ひとつは“日本宗教文化における「死の受容」について”である。「人間はどのように悲しみや苦しみを引き受けてきたのか」という視点で読み解いていきたいと考えている。

もうひとつは富永仲基の研究である。この人物による「加上」や「くせ」といった概念、また比較文化論的立場からの宗教論を分析しようと思う。

- (1) 鈴木 徳 男
- (2) 日本文学、とくに古典和歌
- (3) 平安時代後期の歌書についての注釈的研究に従事。先年、『統詞花和歌集新注』上下二冊を上梓（青簡舎）。現在は、歌書と漢文学との関係をめぐる論考を刊行するべく準備している。また、この期に成立した歌学書の読解に取り組んでいるが、なかでも『俊頼髓脳』は、個人的な研究を著作などで発表しているほかに、相愛大学を会場にして何人かの専門家と輪読会を継続的に行い、その成果を公表している。  
総合研究センターの平成 25 年度研究会において、田中重太郎の学問について報告した。

- (1) 高 木 学
- (2) 社会学（地域社会・サブカルチャー）
- (3) これまでおこなってきた地域社会学分野でのまちおこし活動の研究をベースに、アニメなどのいわゆるオタク分野の作品ならびにファン達が地域社会にかかわっていく様相についての考察を進めている。具体的には、アニメ作品のロケ地となった地域にファンが訪れる「聖地巡礼」現象や地域活性化と結びつけられたアニメやご当地キャラのイベントなどを、参加型まちおこしと n 次創作観光等と結びつけ、今後の可能性と問題点を考える。

- (1) 鳥 井 正 晴
- (2) 日本近代文学
- (3) 学部在学爾来 45 年間、漱石文学を追っています。最近は、晩年期の『道草』『明暗』を中軸に、漱石文学の帰結を考えています。午前には余りにも西洋的な近代小説『明暗』（作者病死のため中絶）を執筆し、午後には 70 余首（生涯 208 首）の余りにも東洋的・禪的な「漢詩」が、同時に創作されました。「則天去私」の標語で語られる漱石の帰結ですが、何故に「私の個人主義」が「去私」になるのかは、「近代」そのものの最終的な課題でもあります。

- (1) 直 林 不 退
- (2) 仏教学、仏教史、仏教文化
- (3) 仏教と社会との接点に位置する布教・伝道の歴史の変遷を考える一助として、『日本靈異記』を伝道史の視点から捉えた論文を執筆。また近世末から近現代にかけての布教使の活動を分析するため、各地の寺院を中心に資料調査も継続中である。その結果の一部は雑誌『節談説教』に報告している。（現在第 11 回分入稿済）

- (1) 中 村 圭 爾
- (2) 中国古代史
- (3) 研究の中心的主題は、一は、中国古代地域史研究史料の史料批判で、正史の地理叙述（地理志等）の分析、散佚地誌の佚文収集整理と原書復元の作業を数年来継続して行っている。  
二は、漢六朝の公文書と文書行政に関する研究で、これはかつて公表した科研の報告書を増補中であり、近い将来出版を予定している。  
なお、科研では、研究代表者として、「都城圏」という概念を仮説的に提示しつつ、数人で資料整理と現地調査を実施中である。

- (1) 西 迫 成一郎
- (2) 社会心理学
- (3) 現在の研究活動は主に次の二つです。一つは、社会的公正感の研究です。これまで、不公正感の構造や不公正感がいかなる感情を喚起するかを検証してきました。今は、公正感の研究を進めているところで不公正感とは異なった構造を持つことまでわかってきました。もう一つは睡眠の心理学的研究で、さまざまな心理学的要因と睡眠との関連性の実証的検証をすすめようとしています。

- (1) 橋 元 淳一郎
- (2) 物理学、赤外線天文学、時間論
- (3) 時間の矢の起源と実在性について、物理学、哲学、生物学、文化人類学など学際的視点から研究を進める。山口大学時間学研究所の客員教授としての活動の他、関連分野の研究者と協同研究を進める。本年の主な著書・論文。『生命倫理のフロンティア』（共著、丸善出版、2013）、「物理の時間、生命の時間」（『こころと文化』多文化間精神医学会、vol 12. No.1, 2013）、「相対論の直感的認識について」（『りずむ』第2号、白樺サロン、2013）。

- (1) 初 塚 眞喜子
- (2) 臨床心理学、発達心理学、発達臨床心理学
- (3) 臨床心理学と発達心理学の2つの視点を交えながら、「発達障害への理解と支援」、「アタッチメント（愛着）と子どもの発達」、「青年期の心理的問題への理解と支援」、「音楽療法によるリラクゼーションと関係性構築のスキルの向上」を、研究・教育・実践活動の主要テーマとしています。地域における活動として、子育て支援、高齢者施設における音楽療法に取り組んでいます。

(1) 藤谷 忠 昭

(2) 社会学

(3) 情報化を背景にした、公的組織をめぐる市民社会の研究

- ①国境離島における対外戦略についての研究（基盤研究 C, 研究代表, 2012 年 4 月～2015 年 3 月）
- ②軍用地と地域社会：沖縄県における軍事基地と軍用地料に関する地域社会学的実証研究（基盤研究 B, 連携研究者, 研究代表：佛教大学 瀧本佳史, 2013 年 4 月～2016 年 3 月）
- ③高齢者施設をめぐる市民活動の研究（介護保険市民オンブズマン機構大阪、運営理事, 2013 年 7 月～）

(1) 前 垣 和 義

(2) 大阪文化

- (3) ①大阪市内の小学校と連携して小学生、保護者、地元の人々への大阪学の授業を毎年実施している。2013 年は、9 月におこなった。
- ②しゃれ心の研究（しゃれと言葉：大阪弁、しゃれとネーミング、しゃれと地名など）
- ③古き大阪弁の研究
- ④テレビ等への大阪文化に関するコメントなど

(1) 益 田 圭

(2) 社会心理学、産業組織心理学、差別・人権論

- (3) 被差別部落に対する差別意識の研究を中心とした差別問題・人権問題や、「働くこと」や組織に関わる人々の意識をテーマに活動しています。社会的な問題である非正規雇用、ワーキングプア、ホームレスなど貧困に関わる状況や人々の意識のあり方に興味を持っています。さらに最近では、現代という時代と、ヘイトスピーチなどにも見られるナショナリズムや人々のアイデンティティとの関係についても研究してみたいと感じています。

(1) 森 光 有 子

(2) 言語学、文化人類学

- (3) 認知言語学の分野で研究を進めると同時に文化人類学の分野でも研究を深めている。世の中の事象の捉え方は文化によって様々で、それをどのように言語化するかもまた多様である。世界の様々な言語や文化を比較観察し、それを通してことばや文化が多様であることの重要性を示し、グローバル化の功罪を考えている。さらに、そこから、日本における言語教育、異文化理解教育のあるべき姿についても考察を加えている。

(1) 山本幸男

(2) 日本古代史

(3) ①正倉院文書の研究

2002年に刊行した単著『写経所文書の基礎的研究』（吉川弘文館）では、天平宝字年間（757-764）の文書の復元研究の成果をまとめましたが、現在は、その前後の時期の文書分析を進めています。写経所にかかわりのある貴族・官人の仏教信仰の実態を解明しようとするもので、次の②の課題と密接に関連します。

②奈良時代の仏教史研究

①の課題の延長上に位置します。これまで、仏教学の成果に学びながら、東大寺の華嚴学や往生をめぐる問題などを研究し、論文として公表してきましたが、それらをまとめた単著『奈良朝仏教史攷（仮）』（法蔵館）を刊行する予定です。

ここしばらくは、②の課題を中心に研究が推移しそうです。

## 【人間発達学部】

(1) 浅田 章

(2) 解剖、生理学

(3) 電位開放型プロトンチャネルはミクログリアの貪食作用に重要である。一方、局所麻酔薬は貪食作用を抑制することなどにより、抗炎症作用を発揮する。リドカインとブピバカインは、主に細胞内 pH を増加させて、プロトンチャネルを抑制した (J Physiol, 2012)。

$\alpha_2$ -agonist である dexmedetomidine が鎮痛効果を持つことを patch-clamp 法を用いて証明した。下行性ノルアドレナリン系を促進し、脊髄後角の抑制系シナプス伝達を促進することにより作用を発揮する (PAIN, accepted)。

(1) 石沢 順子

(2) 身体教育学、野外教育

(3) 東京都中野区幼児研究センターと共同で、幼児を対象とした「運動遊びプログラム」を作成し、保育所、幼稚園での普及・啓発活動に携わっている (研修会の実施、園への訪問指導等)。また、同区内の保育所において、幼児の活動量や運動能力等の測定を行い、保育内容や発達過程との関連についても研究している。

平成 25 年度科学研究費助成事業基盤研究 (c)「幼児の総合的運動遊びにおける身体の動きの特徴と発達過程」研究分担者

(1) 岩口 摂子

(2) 幼児音楽教育学

(3) 保育者養成において、いまもっとも関心のある事は、ピアノ実技指導のあり方です。ピアノは実習や就職での必要性が高いため、授業への目的意識は持たせやすいのですが、いろいろな面で学生の個人差が大きいため、画一的な指導はできません。教科の特性に合った授業評価アンケートを実施する中で見出した課題や、指導上のいろいろな事例を、実技教員間で共有しカンファレンスしながら、新たなピアノ教授法の開発を進めています。

(1) 大島 崇

(2) 教育方法学、カリキュラム論、教師教育

(3) 研究テーマは「子どもの事実に基づく授業研究」です。主に、①戦後初期の授業研究におけるカリキュラム開発と教師の力量形成、②校内授業研究が教師のエンパワーメントを促す条件の解明、という 2 つの柱で研究を進めています。担当講義では、「できる／できない」の枠組みだけで子どもを見るのではなく、子どもの経験を理解することを基盤とした授業づくりについて学びます。

- (1) 太田 美穂
  - (2) 基礎栄養学、分子生理化学、生化学
  - (3) I 専門分野
    - ①ヒトのビタミン D 代謝に関する分子論的研究：
 

細胞の分化や恒常性維持など多様な機能を発揮する活性型ビタミン D とその誘導体の代謝機構について研究している。
    - ②大豆発酵食品テンベが腸内環境に及ぼす影響：
 

テンベ摂取後の腸内菌叢解析と、発酵中に生成される機能性因子の特定に取り組んでいる。
  - II 発達栄養学科・産官学連携、地域連携
 

減塩プロジェクト 2013 での減塩効果実証試験や食と防災シンポジウムでの調査研究を行っている。
- 
- (1) 甲斐 真知子
  - (2) 教育学、教育実践、教科教育
  - (3) ①「現代の教育職のあり方」について、今の子どもたちや学校教育の状況と課題、及び教育行政の新たな提案の内容と課題を中心に、学校現場の取り組みに学びながら研究している。
  - ②教科教育については、主に小学校算数と小学校国語の教育方法について「わかる授業」の指導方法について研究している。
- 
- (1) 川中 美津子
  - (2) 服飾美学、服飾文化史学、ファッション消費者文化論
  - (3) ファッションを中心とした身のまわり物事に対して、服飾美学や服飾文化史的考察を行うだけでなく、消費という視点からの考察を行なっている。大学生や団塊の世代を主に対象とし、日本感性工学会、ファッションビジネス学会等でその成果を報告している。
- 
- (1) 木村 久男
  - (2) 教科教育学、臨床教育学
  - (3) 「生徒指導論」「教育実習事前事後指導」「教育実習（小学校）」「理科指導法」「教職実践演習」等を担当し、学生指導、採用試験対策や教員希望者および卒業生教員の「先生力育成」などの取り組みを行っている。また、「相愛ビオトープ」を中心とした学習環境の開発や学生サポーターの育成、地域貢献活動を進め、保育士や幼・小教員を目指す学生の「最高の学び場」づくりを目指している。



(1) 雲 井 稔

(2) 教科教育学、生活科指導法

(3) 小学校の教員養成に関わっての生活科等を担当。子どもたちにとっては大変楽しい生活科の授業も、「なにを、どう教えていいかわからない」「教えにくい」など教師の指導上の悩みは多く深い。そこで「具体的な活動や体験を通す」という生活科における教科の特性に照らして、①指導法の確立と、②指導と評価の一体化をめざす評価のあり方等を研究。さらに、大阪市小学校教育研究会生活部と連携し、共同研究をすすめている。

(1) 庄 條 愛 子

(2) 食品学

(3) 基礎研究として、①乳酸菌をはじめとする各種多糖の腸管免疫調節作用、②伝統野菜の科学的特徴づけと育農教育、③キノコ糖脂質の生化学的評価を実施している。また、食品学・食品学実験・食品学実習では、実際に頻繁に摂食している味噌や卵などの食品を教材とすることで、理解しやすく、学習後の日常生活において学習内容を再認識することで食品学の実践的な理解を目標としている。

(1) 角 谷 勲

(2) 給食経営管理

(3) 管理栄養士養成課程の学生らの献立作成の意識・能力は、ライフスタイルの変化等様々な要因によって、低下している。その様々な要因とは何か、在学生の食生活行動と献立作成の意識・能力との関連について横断的な実態調査を行ったが、継続的な調査の必要性から今後、縦断的調査による傾向分析を行い関連する要因を明らかにするとともに、実践力向上を目指した教育上有用な課題を探ることを研究課題として活動している。

(1) 高 岡 昌 子

(2) 保育、発達心理、教育心理など

(3) 主に保育者養成にかかわる業務を行っている。また科学研究費助成（挑戦的萌芽研究（課題番号 24653187））を受けて「子どもにおける3次元映像視聴に関する研究」を行っている。この研究では、子どもにおける3次元映像視聴について研究していくことを計画しており、そのためのデータを蓄積しているところである。今年度は日本視覚学会 2013 年夏季大会に参加して、「携帯型ゲーム機のグラスレス 3D 映像視聴による影響」について発表した。

(1) 竹山 育子

(2) 臨床栄養学

(3) 患者自身の生活、家族構成、身体状況を考慮した個別の食事指導を取り入れ、継続的に管理栄養士がケアをすることが、患者の QOL の向上につながることを期待されるため、糖尿病性腎症、血液透析患者を対象に、簡便で取り組みやすい栄養療法について研究している。また、機能性食品の効果について、健常人を対象にダブルブラインドテストを実施し、その効果を検証、臨床現場での応用について研究をすすめている。

(1) 爲房 恭子

(2) 臨床栄養分野、腎不全の栄養管理、高齢者の栄養管理

(3) I 研究活動

「高齢者の栄養状態、身体測定値と体力に関する研究」に取り組み、その対象者（軽費老人ホーム〈B 型〉）に対して、食生活自立支援プログラムを作成の予定である。

II 社会活動

医療介護サービスの仕組みが入院から外来・在宅医療に変化しているにも関わらず在宅療養者の訪問栄養食事指導の利用率は低迷している。管理栄養士の新しい活動分野として開拓していきたいと考え在宅療養者の栄養支援活動をしている。

(1) 多門 隆子

(2) 公衆栄養学

(3) 国内外の研究で、食品中の塩分量の規制が高血圧対策において費用対効果が高いことが示されている。市販食品や外食の栄養成分の改善は、消費者の食品の選択行動の幅が広がり、企業や飲食店の自主的な栄養成分改善にもつながる。そこで、大阪府が実施している「健康づくり応援団の店」推進事業を通して、「塩分控えめ、野菜・食物繊維たっぷり」のヘルシーメニューの提供を推進する食環境整備に関する実践的活動を行っている。

(1) 直島 正樹

(2) 障害児・障害者福祉、児童家庭福祉

(3) 「社会福祉」は私たちの生活に深くかかわり、身近なものであるという考えを持っている。その点について、保育士をめざす学生をはじめ、より多くの方々に感じていただきたいという思いから、『図解でわかる社会福祉』（仮称）という著書の作成を企画し、発行に向けて準備を進めている。また、「保育ソーシャルワーク」をテーマとした研究に取り組んでおり、学会発表等を行っている。

(1) 中西 利 恵

(2) 教育方法、行動分析

(3) 行動分析を専門とし、子どもの育ちと遊びについて継続して研究する中、特に保育者・教員養成校と保育・教育現場との連携や子育て支援をテーマに研究を行ってきた。現在は、養成の現場と保育の現場における実践を通して、子どもにとっても親にとっても学生にとっても育ちにつながる支援のあり方や学習環境の工夫、効果的な養成教育方法の開発について研究を行っている。現場のスタッフと協働して取り組んでいくことを心がけている。

(1) 並 河 信太郎

(2) 学校教育における食に関する指導（食育）及び学校給食

(3) 学校教育における食に関する指導（食育）は給食時間を中心に全教育活動を通じて取り組まれている。児童・生徒の学力として評価をどのように進めていくかが重要である。食に関する指導の目標として食事の重要性など6つが示されている。目標に基づいて、評価規準を策定するとともに、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「知識・理解」「技能」の観点別学習状況の評価の在り方を明らかにしていくための研究を進めている。

(1) 細 川 速 見

(2) 障害児者関係

(3) 大阪市内で障害児者支援センターを運営しており、現場での活動を大学の授業にも取り入れている。又、障害当事者やその親にも授業に参加していただいて体験を話してもらい、保育や教育の内容を共に皆んなで考え、実践している。

(1) 水 野 淨 子

(2) 生化学、免疫

(3) 担子菌（Basidiomycota）は子実体や胞子を形成する。その子実体（キノコ）は食用として馴染み深く市場に多数出回っているが、機能性研究が行われているものは限られている。一方、セラミド含有スフィンゴ糖脂質（GSL）はNKT細胞の活性化、感染防御、自己免疫疾患との関連が指摘され、免疫薬理学的有用物質として注目されている。キノコによる健康維持、増進を脂質生化学的・脂質免疫学的側面からキノコの第三次機能として解明することを目的として研究を進めている。

(1) 宮 谷 秀 一

(2) 栄養学分野

(3) プラダー・ウイリー症候群児は幼児期から食欲が亢進し、高度肥満や2型糖尿病を発症しやすい。私は本症候群児の治療法確立に必要な指標を得るため、大阪府立母子保健総合医療センター（位田、恵谷、西本 他）同志社大学スポーツ健康科学部（海老根）、国立健康・栄養研究所（中江）の各氏と「二重標識水法と呼気ガス分析によるプラダー・ウイリー症候群児のエネルギー代謝に関する研究」を行っている。

(1) 村 井 陽 子

(2) 栄養教育

(3) 食生活の向上と伝統的な食事スタイルの維持とが相まって「日本型食生活」が生まれたが、その後の食生活の豊かさは飽食という新しい危機へと進行した。食の簡便化、外部化が進行する中で「日本型食生活を見直す」をコンセプトとし、一汁三菜の伝統的食事スタイルに焦点を合わせて、小学生を対象に「主食・主菜・副菜を組み合わせる食べよう」、また高校生を対象に「野菜たっぷりみそ汁を作ろう」の食育活動を展開している。

(1) 山 口 繁

(2) 公衆栄養、食育

(3) 私は、健康づくりに多大な影響を及ぼす健康食品について特に関心がある。若い世代にはダイエットのための欠食や、食事代わりに安易にサプリメントに頼る傾向がある。その原因の一つにテレビ、新聞、雑誌等の誇大広告があげられる。広告はインパクトのある写真、言葉、映像で消費者のハートを掴もうと必死である。その防止策として健康食品の正しい知識と選択能力などが体得できるよう微力ながら大学教育の中で学生に指導している。

(1) 渡 部 美穂子

(2) 社会心理学、死生観

(3) 現代の日本人の死生観および宗教観のありようとその規定因を明らかにするとともに、宗教観が死生観に及ぼす影響や、死生観が他の態度や行動へ与える影響などについて継続的研究を行っている。さらに昨年度からは、3カ年の計画で科研費基礎研究（B）：宗教性／スピリチュアリティと精神的健康の関連－苦難への対処に関する実証的研究－の連携研究者として、大規模な調査研究にも参加している。

## 【共通教育センター】

(1) 江 草 浩 幸

(2) 認知心理学

(3) これまで、視知覚、視覚-運動協応、感覚間相互作用などについて、コンピュータと自作のプログラムで制御する機器を用いた実験的研究を行ってきた。その中には視野変換という状況を利用したものが多い。そのような研究は現在も継続しているが、それ以外に、他大学の教員と共同で、触知覚に対する姿勢の影響や幾何学的錯視に対する輝度や提示時間の影響などの解明を目指している。

(1) 奥 野 浩 之

(2) 教科教育学（社会科）

(3) 中等教育の憲法学習について、内容・方法の両面から研究を進めている。平成 25 年度の活動としては、論文「憲法学習のフロンティア」を『相愛大学研究論集第 29 巻』で発表した。また、「憲法学習のユニバーサルデザイン」、「憲法学習における教科内容構成研究」と題し、それぞれ学会発表を行った。著書としては、『社会科教育 8 月号』の特集（p.51）を担当し、新課程用の実教出版『新日本史 A』、『日本史 B』教科書の教師用指導書を執筆した。

(1) 北 克 一

(2) 図書館情報学

(3) 社会では、国立国会図書館機関誌編集委員会企画委員、大阪府立図書館・図書館協議会副議長、大阪府立図書館外部評価委員会委員長、奈良県図書館ネットワーク副代表、図書館とマルチメディア研究会代表等を勤めています。

主な研究分野は、情報メディア論、情報資源組織論、著作権法などです。

(1) 千 葉 真 也

(2) 日本近世文学（とくに国学）

(3) 本居宣長と賀茂真淵を中心に国学者の営為を実証的に明らかにすることを継続している。現在は、『嶺松和歌集』に取り組んでいる。『嶺松和歌集』とは、宣長を中心とする松阪の和歌愛好者を主要メンバーとした嶺松院歌会の記録である。歌会の生の姿を記した当該資料の精査により、宣長の作歌活動についてあらたな知見を加えるつもりである。

なお、授業に関連して中古から近世の和歌全般、さらに江戸時代の食文化についても調査を行っている。

- (1) 長谷川 精 一
- (2) 教育史、思想史
- (3) 以下の3点について考察を進めていきたいと考えている。
  - ①言語と教育の関係について、特に沖縄における標準語教育の歴史に関して究明すること。
  - ②「愛郷心」と「愛国心」との関係に関して、郷土教育の概念と実践の歴史を参照しつつ検討すること。
  - ③明治期の思想家の中で、特に森有礼、及び、福沢諭吉の思想に関する理解を深めること。

- (1) 山 下 昇
- (2) 文学（主にアメリカ文学）
- (3) 日本アメリカ文学会、日本ウィリアム・フォークナー協会、黒人研究会等の学会・研究会活動を中心として、アメリカ・マイノリティ文学研究を行っている。その活動の一端は、近著『ハイブリッド・フィクション——人種と性のアメリカ文学』（開文社、2013年10月）として公刊した。今後はアジア系アメリカ文学会、京都大学人文研究所のシンポジウムなどに参加し、広く研究活動を行う予定。また「フォークナーと『老い』研究会」での共同研究の後に、出版も計画している。さらに来年度には日本アメリカ文学会全国大会での招待発表、日本英文学会関西支部機関誌への招待論文が内定している。

